

# エッセネ派に関する一考察

土 岐 健 治

## I

紀元後一世紀のユダヤ人歴史家ヨセフスによるエッセネ派<sup>(2)</sup>についての長い記述の中に、次のような文章が見出される。(『ユダヤ戦記』II 151b-153)<sup>(3)</sup>。

151 ……彼らは危険を軽んじ、精神力によって苦難にうちかち、死も、<sup>(4)</sup> 栄光を伴ったものならば、不死よりも優れたものとみなしている。152 ローマ人に対する戦いは彼らの魂をあらゆる面にわたって試みた。立法者<sup>(5)</sup>を冒瀆し、あるいは、食べる習慣でないものを食べるようにと、拷問台の上に縛りつけられ、ねじ曲げられ、焼かれ、引き裂かれ、あらゆる拷問具の中を通らされても、いずれの要求にも屈することなく、拷問を加えている者たちにへつらったり、あるいは涙を流すこともなかった。153 むしろ、苦難の中にもほほ笑みをうかべ、拷問係の者たちをあざ笑い、再び(生命を)取り戻すのだといった態度で喜んで生命を投げ捨てたのである。

ローゼは、エッセネ派について記した文章の最後の部分で、上掲箇所を引用しつつ、「彼らは人目につくような行動をとることはまれであったが、それでも彼らの生き方は模範として感化を与え、特にローマに対する反乱の時には注目されたのであり、かなりのエッセネ宗徒たちが積極的に反乱に参加し、そのうちのある者たちは指導的立場にあった」と記している<sup>(6)</sup>。ヘンゲルもまた同じ箇所を典拠として挙げて、エッセネ派はローマとの対決をも辞さず、自分たちの住居を守るためにローマ人と戦った、と<sup>(7)</sup>言う。ミヒェルは上掲箇所 (II 152) への注釈において「この報告により、エッセネ派の少なくとも一部がローマ人との戦いに積極的に参加したことが帰結され得る。

……紀元後 68 年におけるキルベト・クムランの彼らの住居の終焉も、この宗派が戦いに参加したことを物語るものであろう」と記している。<sup>(8)</sup> さらにヴェルメシュも、エッセネ派の一人物が反ローマ戦争に参加したことを伝えるヨセフスの記事（後述）を紹介した後に、続けてヨセフスの上掲箇所を引きあいに出して、クムラン共同体の崩壊がローマ軍との戦いによるものである可能性を示唆している。<sup>(9)</sup>

しかし、筆者は、これらの碩学たちが何の疑問も抱くことなく信頼している（ヨセフスほど信用されない歴史家も少ないにもかかわらず！）ヨセフスの上掲箇所の歴史的信憑性について重大な疑問を抱く者であり、以下においてその点について検討を加えることにしたい。

## II

ところで、エッセネ派に関してはヨセフスも含めてローマ時代の三人の著述家たちがまとまった記述を残している。それは、ヨセフスの『ユダヤ戦記』II 119-161. 『ユダヤ古代誌』XIII 171-3, XV 371-9, XVIII 18-22, ピロン（フィロン）<sup>(10)</sup> の『すべての善人は自由である』12 (75)-13 (91), 『仮設（或は、ユダヤ人のための弁明）』<sup>(11)</sup> 11. 1-18, 大プリニウスの<sup>(12)</sup> 『自然史』V<sub>xv</sub> (73), 以上である。これらの証言に描かれているエッセネ派は、一言で言えば徹底した平和主義者である。ピロンによれば「彼らの中のある者たちは農耕に従事し、他の者たちは平和に奉仕し得る技術を追求する」（『すべての善人は自由である』76）。『仮設』11. 8-9 にも「彼らの中のある者たちは、種播や耕作にたけた農夫であり、ある者たちは牧夫であってあらゆる種類の家畜を管理し、またある者たちは蜜蜂の群を飼っている。他の者たちはさまざまな技術に通じた職人たちである」とあり、『ユダヤ古代誌』XVIII 19 には「彼らは専ら農業に従事している」とある。ピロンはさらに「彼らの許には、矢、投げ槍、短剣、兜、胸あて、楯を造る職人、つまり総じて武器や戦具を造る者、何であれ戦争に関わりのあるものを造る者は一人もいない。また、平和に関わりのあるものの中でも不正（悪*κακία*）に用いられ得るようなものも（造らない）」（『すべての善人は自由である』78）と言う。また、ヨセフスによれば「彼らは怒りの義しい管理者であって、憤りを抑制することができ、信実さ（信義 *πίστις*）の守り手、平和に奉仕する者たち（*εἰρήνης ὀπουργοί*）」（『ユダヤ戦記』II 135）であり、新入者は宗派の共同の食事（極めて儀式的）に与る前に「……故意にせよ命令によるにせよ、人を害さないこと」（同 139）を誓わせられるのである。このように、これらの資料からうかがわれるエッセネ派は

静穏な生活を至上命令とする<sup>(14)</sup>平和主義者である。そしてこれらの資料全体の中で『ユダヤ戦記』II 151b-3 は極めて異質な印象を与えるのである。それだけでなく、66-70 (乃至 73) 年の第一次ユダヤ戦争においてローマ軍がこのような宗教的迫害や拷問をユダヤ人に対して加えたことは伝えられていないし、特に、クムランの修院がローマ軍によって破壊された時期とされている(後述参照)68年のローマ軍の行動を伝えている中で、ヨセフスはこのようなエッセネ派に対する迫害には一言もふれていないのである。もしもこのような迫害が実際にあったとしたならば、当該箇所においてヨセフスがそれを記さないなどということはほとんど考えられないことである。同じことは同時代の著作家(しかもティトゥスと共にパレスチナを巡った可能性すら想定される)<sup>(15)</sup>大プリニウスについてもあてはまる<sup>(16)</sup>。

### III

そこで『ユダヤ戦記』II 151b-3 の検討に移ることにしたい。筆者はこの部分の叙述が、マカベア戦争時代の殉教者物語を描いた、「第二マカベア書」(旧約聖書外典)および「第四マカベア書」(旧約聖書偽典)の記事と酷似していることに着目し、ヨセフスとこれら二書の原文(いずれもギリシア語)を比較検討することによって、ヨセフスの記事がこの殉教者物語の記事に依存していることを明らかにしようと考える。

まず最初に、この殉教者物語について簡単に紹介することにしたい。紀元前175年9月にアンティオコス四世エピパネスがシリアのセレウコス王朝の王位について以来始められたユダヤ(人)に対する干渉は、169年(そしておそらくは168年も)王のエルサレム侵入・略奪、それに続く宗教的迫害、と拡大の一途をたどり、ついに167年聖なる神殿の祭壇上に「荒らす憎むべきもの」が置かれるに至って、ユダヤ人による反シリア戦線の結成を促し、いわゆるマカベア戦争へと突入する。その頃(といっても時期ははっきりしない)、老律法学者エレアザルが律法に禁じられている豚肉を食べることを強いられるが(つまり「踏み絵」である)これを拒んで処刑され、次いで七人の兄弟たちとその母親が次々と同様の律法違犯を迫られ、残虐な拷問にかけられて殺される。(但し、王が臨席しているとされながらその場所も時期も——「第二マカベア書」はマカベアの乱勃発の直前にこの物語を置いているが——示されておらず、また、同じ時代の歴史を記している「第一マカベア書」がこの殉教物語に言及していないところから、この物語の史実性は低い)。

ところで「第二マカベア書」がキュレネの人ヤソンなる人物(おそらくユダヤ人)

の記した五巻本の歴史書に基づくことは「第二マカベア書」の著者自身の記すところ(2: 23)に従って広く受け容れられている。残念ながらヤソンの歴史書そのものは残存していない。一方「第四マカベア書」(「第二マカベア書」より年代は遅い<sup>(17)</sup>)にも同じ殉教物語が伝えられているところから、これが「第二マカベア書」によるものなのか「ヤソンの歴史書」によるものなのか、が問題となるが、筆者はフロイデンタールの詳細な研究<sup>(18)</sup>に依拠しつつ、「第四マカベア書」はヤソンの書物を利用したものと考える。以下『ユダヤ戦記』II 151b-3 を左欄に、「第二マカベア書」6: 18-7: 42 (殉教物語の部分)と「第四マカベア書」(全体が殉教物語をテーマとしている)を右欄に置いて、両者を比較検討する。(その際 II=「第二マカベア書」、IV=「第四マカベア書」、LXX=セブチェアギンタ (=七十人訳聖書=ギリシア語訳旧約聖書。IIもIVもこの中に含まれている)と略記)。

151

καταφρονηται δὲ τῶν δεινῶν  
彼らは危険を軽んじ

τὰς μὲν ἀλγηδόνας νικῶντες  
苦難にうちかち

ταῖς φρονήμασι  
精神力によって

τὸν δὲ θάνατον, εἰ μετ' εὐκλείας  
死も栄光を伴ったものならば  
(注4参照。よき聞こえや名声を求めるとい  
うことはエッセネ派に関しては全く言及され  
ていない。また後述するように靈魂不滅を信  
じていたエッセネ派が「名譽ある死を不死よ  
りも優れたものとみなしている」というのも  
奇妙なことである)。

152

στρεβλούμενοι<sup>(20)</sup>  
拷問台の上に縛りつけられ

IV 8: 15 ὀρώντες δεινὰ...οὐκ ἐφοβήθησαν  
恐ろしいものを見ても恐れなかった

II 7: 12 ὡς ἐν οὐδενὶ τὰς ἀλγηδόνας ἐτίθ-  
ετο

苦痛を何とも思っていない  
(ἀλγηδών は LXX の 16 例中 II と IV の  
用例が 15。νικάω の目的語として拷問とそ  
の苦痛をとるのは LXX では IV 6: 33, 9:  
6, 11: 20 のみ)

II 7: 21 γενναίᾳ φρονήματι  
高貴な思いに (満たされて)

II 6: 19 τὸν μετ' εὐκλείας θάνατον  
良い聞こえを伴った死  
(εὐκλεία の LXX の用例は 3 つ)

IV 9: 17 στρεβλοῦτε τὰ ἄθρα

関節をねじ曲げるがよい  
(στρεβλόω は IV 12: 4, 11, 15: 14 にも用  
例がある。LXX の用例は他に 2 つ)。

καϊόμενοι

焼かれ

κλώμενοι

引き裂かれ

βασανιστήριον ὄργανον

拷問具

(βασανιστήριος ≒ セフスの用例はここのみ)

οἱ αἰκίζόμενοι (中動態)

拷問を加えている者たち

οὐδὲ κολακεῦσαι τοὺς αἰκίζομένους

拷問を加えている者たちにこびへつらうことなく

οὐδὲ...δακρῦσαι

涙を流すこともなく

153

κατειρωνεύμενοι τῶν τὰς βασάνους προσφερόντων

拷問係の者たちをあざ笑い

εὐθυμοὶ τὰς ψυχὰς ἠφείεσαν

喜んで生命を投げすてた

ὡς πάλιν κομιοῦμενοι (sc. τὰς ψυχὰς)

再び(生命を)取り戻すのだといった態度で(≒セフスは『ユダヤ戦記』II 154で、エッセネ派は靈魂(ψυχή)の不死を信じていた(155によれば、善き魂には死後心地よいすみかが用意されている)と記している。このことばはそれと矛盾し、「第二マカベア書」にうかがわれる復活思想と一致している)。

IV 8: 12 στρεβλωτήρια

拷問台

IV 6: 26 κατακεκαυμένος

焼き尽くされ

(IV 15: 20 の *σάρκας τέκνων ἀποκαιομένων* をも参照)。

IV 9: 14 κατὰ πᾶν μέλος κλώμενος

手足がばらばらにされた

IV 6: 1, 8: 1, 12, 19, 25 βασανιστήριον

拷問具

II 7: 1 αἰκίζόμενοι 拷問される(受動態),

7: 13 αἰκίζόμενοι

拷問する(中動態), 7: 15

ἠκίζοντο 拷問した(中動態)

IV 1: 11 οἱ αἰκισάμενοι 拷問を加えた者たち(中動態), 6: 16 αἰκισθείς 拷問される(受動態)

(II 8: 28, 30 の *ἠκισμένοι* をも参照。LXX の用例は他に1つ)

(同じことばは現われないが、殉教者たちは拷問係の者たちにこびへつらわない)

IV 15: 20 οὐκ ἐδάκρυσας

あなた(母親)は泣かなかった

II 7: 27 χλευάσασα τὸν ὤμῶν τύραννον

母親は野蛮な王をあざ笑い

(βάσανος「拷問」の用例は II 7: 8, 9: 5, IV 40 回, LXX 全体では 58 回)

II 7: 2, 8: 21, IV 9: 1

ἔτοιμοι ἀποθνήσκειν

死ぬ準備ができています

II 7: 11 ταῦτα (sc. μέλη) πάλιν ἐλπίζω κομίσασθαι

再びこれら(の肢体)を与えられるものと望んでいる

II 7: 29 ἵνα κομίσωμαί σε 私(母親)がお前(末子)を(死後)手に入れることができるように

以上の比較検討により、類似は単に偶然的なものではなく、ヨセフス（ないしはその資料）の方が、既に存在していた殉教物語を利用したと結論してよいであろう。特にヨセフスのエッセネ派に関する記述の他の部分と明白に矛盾し、殉教物語と明白に一致するいくつかの箇所が決定的な意味を持つ。そこでヨセフスは「第二マカベア書」と「第四マカベア書」、ないしは「ヤソンの歴史書」を利用したと想像されることになるが、筆者は後者の可能性が高いように思う。しかしこの点についての検討はなお将来の課題としなければならない。いずれにせよ『ユダヤ戦記』II 151b-3 はマカベア時代の殉教者物語に基づく創作である、というのが筆者の結論である。

最後に、『ユダヤ戦記』II 151b-3 を除いた上で、エッセネ派がローマ軍と戦ったことを示すものとしてもち出される他の二つの証拠を検討し、考古学的証拠をも援用してクムラン修院の最後について簡単に記してみたい。

#### IV

エッセネ派が第一次ユダヤ戦争に参加したことを示すとされる証拠の一つは、『ユダヤ戦記』II 567 である。そこにはエッセネ派のヨハネなる人物がローマ人と戦うべく「タムナ、リュッダ、ヨッパ、アマウス」地方の指揮官に任命されたと記されている。この簡単な記事が、果してエッセネ派の一部なり全体なりが反ローマ戦線に参加したことを示唆しているであろうか。ヤディンは、たった一人のエッセネ派が反乱に参加して指揮官になったと考えるのはおかしい、<sup>(21)</sup> と言う。しかしわれわれはむしろこの記事の他にはヨセフスの著作中どこにもエッセネ派がローマとの戦いに参加したという記事を見出さないという事実<sup>(22)</sup> に注目すべきである。エッセネ派のヨハネが参戦したという記事のみから、あるいはこれに『ユダヤ戦記』II 152-3 を重ね合わせ<sup>(23)</sup> て、エッセネ派がその一部にせよまとまって参戦したという結論を引き出すことは、確かな証拠に基づかない空想の産物という外はない。

今一つの証拠として挙げられるのは、クムラン第四洞窟から二つの断片が発見されていた The Song of the Sabbath Sacrifice あるいは The Angelic Liturgy と呼ばれるテキスト（正式略記は 4QŠir Šabb 乃至は 4QŠhir Shab）の写本断片が1963-5年の発掘調査の際にマサダから発見されたことである。マサダはエルサレム陥落（70年）後も<sup>(24)</sup> 73年に至るまでローマ軍に対して抵抗を続けた熱心党最後の拠点となった要塞である。この断片の発見者ヤディンは、興奮さめやらぬ筆致で、あたかもエッセネ派が反ローマ戦線に参加したことがこれによってまごうかたなく明白になったか

のように記している。<sup>(25)</sup>しかしクムランの修院が放棄された後で、熱心党の誰かがこの写本をクムランから持ち出したということも充分考えられるのである。<sup>(26)</sup>仮にマサダにこれを持ち込んだのがエッセネ派の人物であったとしても、そのことが直ちにエッセネ派が一部にせよまとまって参戦したことの証拠となるとは言えないであろう。<sup>(27)</sup>

以上の点をふまえつつ、クムラン修院の最後についてヨセフス及び考古学的証拠に基づいて推測されるところを記すことにしたい。

ローマ軍の将軍ウェスパシアヌス（後の皇帝）は68年春その軍隊の大部分を率いてカイサレイアを出発すると、アンティパトリス、リュッダ、ヤムニア、アマウス、イドゥマヤ、サマリヤなど各地に転戦して戦果を収めた後、その年の6月にはエリコに達し、ここで「第10部隊」を率いるトラヤヌスと合流した（『ユダヤ戦記』IV 443-450）。ウェスパシアヌスはエリコ滞在中に死海を訪れ、泳げない人間（捕虜？）を後ろ手に縛って死海に投げ込み、実際に浮き上がってくるのを確認している（同477）。また彼はエリコに永続的な陣営を設置した（同486）。

一方、クムラン遺跡から発見されたユダヤ硬貨の最後のものが反乱の三年目すなわち68年春-69年春のもの（つまり68年春から流通し始めたもの）であり、同じ遺跡で発見されたローマ硬貨の最初のもものが67-68年のものであるということ、さらにこれに加えて、前者は古い層（破壊された層）から、後者は新しい層（古い層の上に再構築された層）から発見されているという事実は、68年こそが古い層と新しい層の交代の時期、つまりクムラン修院の破壊された時期であったことを物語っている。<sup>(28)</sup>ヨセフスの記述とこの考古学的証拠とを重ね合わせると、68年の夏頃にこの地域に進軍したローマ軍によってクムラン修院が破壊された可能性は高いと言ってよいであろう。その際に、ちょうど上述のエリコの住民のように、クムランの住民たちもローマ軍の来襲を察知していち早く逃亡したのであろうか、それとも、黙々としてローマ軍の刃にかかって殺されたのであろうか、その点はもはや確かめるすべもない。しかし、彼らが武器をとってローマ軍と勇敢に戦ったという可能性は、ローマ軍が彼らをとさらに迫害し拷問したという可能性と共に、低いように思われるのである。

## 注

1. 37-38年生、100年頃歿。第一次ユダヤ戦争（66-70ないし73年）に際しては、最初ユダヤ軍の指揮官として戦ったが、彼のたてこもったヨタバタ（ナザレの北十数キロメートル）の要塞の陥落と共にローマ軍に投降し、ローマ軍の案内人となり、70年エルサレム陥落の

後ローマ軍と共にローマへ赴き、以後その死に至るまでローマで著作活動に専念した。『ユダヤ戦記』(7巻), 『ユダヤ古代誌』(20巻), 『自伝』(1巻), 『アピオン反論』(2巻)がその著作として伝えられており、いずれもギリシア語で記されている。

2. バリサイ派, サドカイ派と並べてその名を挙げられるヘレニズム・ローマ時代のユダヤ教の一宗派。クムランの遺跡はエッセネ派の修院であったとされている。
3. 翻訳底本としては O. Michel and O. Bauernfeind, *Flavius Josephus: De Bello Judaico* 2nd ed., Bd. I: Buch I-III (München: Kösel, 1962) を用いた。
4. εὐκλεία は、神から与えられる栄光というよりは、良い評判とでもいった意味。
5. νομοθέτης はモーセを指す。
6. E. Lohse, *Umwelt des Neuen Testaments* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1971), pp. 61f. 加山宏路・加山久夫訳『新約聖書の周辺世界』(日本基督教団出版局, 1976年), 104-5頁。この書物は現代のドイツ語圏における最も標準的な新約聖書時代史の教科書。
7. M. Hengel, *Die Zeloten*, 2nd ed. (Leiden/Köln: Brill, 1976), pp. 85 (n. 4), 267. ヘンゲルは現代における最も博識にして信頼すべき新約時代史家の一人。
8. 注3で挙げた文献438頁注79。ミヒェル(436頁注65)によれば Ricciotti も同意見とのこと。
9. G. Vermes, *The Dead Sea Scrolls: Qumran in Perspective* (Ohio: Collins, 1978), pp. 155f. ヴェルメシュはクムラン文書及び後期ユダヤ教の専門家として定評がある。なおオールズはヴェルメシュよりもさらに慎重である。Cf. L. Calista Olds, "The Essenes" in E. Schürer, *The History of the Jewish People in the Age of Jesus Christ A new English version revised and edited by G. Vermes, F. Millar and M. Black*, Vol. II (Edinburgh: T. & T. Clark, 1979), p. 588 (この書物は、今世紀初頭に出版されて以来この方面の権威としての地位を保ってきたシューラーのドイツ語原著(現在も版を重ねている)が、特にクムラン発見以降の研究のめざましい進展に照らしていささか時代遅れとなった面もあるので、これを、新しい研究成果を踏まえつつ、英語圏の学者を中心として改訂したもの)。ヴェルメシュとオールズはエッセネ派がまとまって参戦したとは明言していない。しかし『ユダヤ戦記』II 152-3の資料的価値は何の留保もつけることなく認めている。
10. 紀元前25乃至20年頃生, 紀元後50年頃歿 (S Sandmel, *Philo of Alexandria* (NY: Oxford University Press, 1979), p. 3)。アレクサンドレイアのユダヤ人哲学者。ギリシア語による膨大な著作を残している。
11. この文書は失われたが、エウセビオスの『福音の準備』8巻11章における引用によってうかがうことができる。
12. 紀元後23年生, 79年ウェスウィウス火山の爆発により歿。ラテン語による多くの著作を残した。
13. 以上の文書のテキストとしては、『ユダヤ戦記』についてI注3であげたミヒェルのものを用いた他は、Loeb版を利用した。
14. 彼らが特に沈黙と静寂とを重んじたことは『ユダヤ戦記』II 128, 131などに明らかであ

る。

15. A. Dupont-Sommer, *The Essene Writings from Qumran*, translated by G. Vermes (1961; reprinted, Mass.: Peter Smith, 1973), p. 37.
16. デュボン-ソメルはさすがにこの点に気が付き、「ある人々は、ここで問題となっている戦争は紀元前 63 年のポンペイユスとの戦いのことであると言っているが、この点はなお不明である」と記している（前掲書 p. 33, n. 2）。しかし（デュボン-ソメルほどの学者が気付かないのは不思議なことであるが）ポンペイユスとの戦いについても事情は全く同じである。
17. 筆者は「第二マカベア書」の著作年代を紀元前 124 年と考える（K. Toki, "The Dates of the First and Second Books of Maccabees," *Annual of the Japanese Biblical Institute*, Vol. III 1977, pp. 69-83）。しかしこの説に立たない場合でも、同書の著作年代を紀元前一世紀前半以前（前二世紀後半以降）とする点において諸家の意見は一致している。これに対し「第四マカベア書」の著作年代についてはこれを紀元後 20-54 年とするビッカーマンの説（E. J. Bickerman, "The Date of IV Maccabees", in *Louis Ginzberg Jubilee Volume*, New York, 1945, pp. 105-112）が今なお有効である。いずれにせよ「第四」が「第二」より後である点は動かない。
18. I. Freudenthal, *Die Flavius Josephus bezeugte Schrift über die Herrschaft der Vernunft, eine Predigt aus dem ersten nachchristlichen Jahrhundert* (Breslau: Schletter'sche Buchhandlung, 1869), pp. 72-90.
19. テキストとしては以下のものを用いる。R. Hanhart, *Maccabaeorum liber II* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1959); A. Rahlfs, *Septuaginta I* (Stuttgart: Württembergische Bibelanstalt, 1935), pp. 1157-84. また邦訳は原則として教文館版『聖書外典偽典』1 および 3 所収の拙訳によった。ギリシア語の読めない読者にも検索が容易なためである。そのため原語の一致が必ずしも翻訳には反映していない。また LXX の用例については E. Hatch and H. A. Redpath, *A Concordance to the Septuagint I, II* (1897, reprint Graz: Akademische Druck- u. Verlagsanstalt, 1954) によった。またヨセフスの用例については K. H. Rengstorff, *A Complete Concordance to Flavius Josephus, I-III* (Leiden: Brill, 1973-9. IV (P-Q) が未刊) を参照した。
20. このことばには twist, strain tight の他に, stretch on the wheel or rack, rack, torture の意味がある (Liddell & Scott's *A Greek-English Lexicon* による)。
21. Y. Yadin, *Masada* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1966), 田丸徳善訳『マサダ』(山本書店, 1975 年), 194 頁。もっともヤディンのことばは次に挙げる証拠発見の興奮の中で記されたものである。
22. E. M. Smallwood, *The Jews under Roman Rule* (Leiden: Brill, 1976), p. 300, n. 25. さすがに彼女はいささかの躊躇を示している。ただ彼女が、もしもヨハネに対して用いられている 'Εσσαίος がエッセネ派を指すのなら、と言っているのは理解に苦しむ。確かにヨセフスはエッセネ派に対して一般に 'Εσσηνός を用いているが、ピロンは一般に 'Εσσαίος

- を用いており、ヨセフスもしばしば *'Eσσαίος* を *'Eσσηνός* と同義に用いている。
23. 前述のヘンゲル、ミヒエルはこの立場。ローゼは『ユダヤ戦記』II 152-3 のみを典拠とする。
  24. 最近ヴェルメシュ他がこれを74年とする新説をたてている。ヴェルメシュ前掲書(注9), 20, 34頁。『新シュラー』(注9) I 卷(1973年) 512頁参照。
  25. ヤディン, 前掲書, 193-5頁。
  26. オールズ, 前掲書(注9), 588頁参照。
  27. スモールウッド, ヘンゲルはエッセネ派の参戦問題にふれた前掲箇所において, ヤディン説を完全に無視している。ヴェルメシュはヤディン説を知っているながら(前掲書, 20, 133頁), それを取りあげて論評を加えることもなく, エッセネ派(クムラン)の最後を描いた同書155-6頁では, ヤディン説を完全に無視している。注6でふれたオールズも含めて, ヤディン説に対する学界の反応は冷たいようである。
  28. ウェスパシアヌスは皇帝ネロの死(68年6月9日)の報にカイサレイアで接しており(『ユダヤ戦記』IV 491)彼のエリコ滞在は短かかったものと思われる。
  29. R. de Vaux, *Archaeology and the Dead Sea Scrolls* (London: Oxford University Press, 1972, reprint 1977), pp. 36-41.

## 資 料

ピロン『すべての善人は自由である』75-91

75. シリアのパレスチナもまた善美を生み出す土地である。きわめて人数の多いユダヤ人という民族の少なからざる部分がここに居住している。彼らの中にはエッセネ人 (*'Eσσαίος*) と呼ばれる人々がいる。その数は四千を超える。私の考えでは——(彼らの名称は)正確なギリシア語形ではないが——彼らの名称は「聖潔」(*δαιμόνης*) ということに基づくものと思われる<sup>(1)</sup>。彼らは、動物を犠牲として献げることによってではなく、自分たち自身の思いを聖なる御方(神)にふさわしいものとしてとのえることを大切にすることによって、とりわけ神に仕える者たちだからである。

76. この者たちは、第一に、町に住む人々の間に習慣的となっている不法の故に、町を逃れて村に住んでいる。ばいきんだらけの空気から病気が生ずるように、一緒にいる(町の)人々から癒し難い悪影響を靈魂に対して蒙ると考えているからである。彼らの中のある者たちは農耕に従事し、他の者たちは平和に奉仕し得る技術を追求する。こうして自分たち自身と隣人たちとを益するのである。彼らは銀や金を貯えることなく、利得に対する欲望から広い土地を所有することもなく、生活にどうしても必要なものだけをとのえるのである。

77. 全人類の中でも、運が無かったためでなくむしろ進んで金銭や財産を放棄しているのは、ほとんど彼らだけであるが、彼らこそ最も富んでいると考えられる。彼らのごくわずかのものしか必要とせず、それで満足していることこそが、事実そうであるとおりに、豊かさであると考えているからである。

78. 彼らの許には、矢・投げ槍・短剣・兜・胸あて・楯を造る職人、つまり総じて武器や戦具を造る者、何であれ戦争に関わりのあるものを造る者は一人もいない。また、平和に関わりのあるものの中でも不正(κακία)のために用いられ得るようなものも(造らない)。彼らは実際商業については小規模なものにせよ、船を使うような(大規模な)ものにせよ、何の夢も抱いておらず、より多く持ちたいという衝動を退けるのである。

79. 彼らの許には奴隷は一人もおらず、全員が自由人としてお互いに親切を施し合う。彼らは支配者(δεσπότης)を軽べつするが、彼らは、支配者というのは平等を蹂躪する不義な者たちであるばかりでなく、自然の定めを破壊する不敬虔な者たちであると考えている。自然は母親のような仕方万人を同じように生み、はぐくみ育て、名目上のみならず実質的に、真の兄弟たちとしたのであるが、彼ら(兄弟たるべき万人)の親しいきずなを、欺瞞的な食欲が優勢となってぶち壊してしまい、親和(οἰκειότης)に代えて疎遠(ἀλλοτριότης)を、友愛に代えて敵意を生み出したのである。

80. 彼らは哲学の中でも理論的な部分(τὸ λογικόν)は徳の獲得にとってなくてはならぬ部分ではないとして、ことばを追求する者たちの手に委ね、自然学(τὸ φυσικόν)は人間の本性を超えるものとして「星を見つめる人々<sup>(2)</sup>」の手に委ね——ただ自然学の中でも神御自身の存在と万物の生成に関する部分は別であるが——父祖伝来の律法(νόμοι)を導き手として専ら倫理学(τὸ ἠθικόν)<sup>(3)</sup>を熱心に追求する。この律法は神の靈感なしには人間の魂の考え出し得るものではない。

81. 彼らはこれらを常に教育されるのであるが、とりわけ第7日目ごとにそうする。7日目は聖なる日として区別されているからである。その日には他の仕事をやめて、シナゴグ(会堂)と呼ばれる聖なる場所へ出かけて行き、年齢に従って秩序正しく若者が老人の下座に着席し、その場にふさわしい礼儀作法を守って喜んで耳を傾ける。

82. すると一人の人が書物を取りあげて朗読し、特に経験豊かな一人の人が進み出て判りにくい部分を説明する。というのも、古めかしい熱意をもって、彼らはその哲学の大部分を象徴(比喩, σύμβολον)<sup>(4)</sup>を通して遂行するのである。

83. 彼らは敬虔、聖潔、正義、家政(οἰκονομία)<sup>(5)</sup>、市民生活(πολιτεία)、真理に照らして善なることと悪なること及び善でも悪でもないことに関する知識、選ぶべきものを選びとり、反対のものを避けること、を学び、根本原則(規準)として愛神・愛徳・愛人の三つを定めている。

84. 彼らの愛神の例は無数にある。全生涯を通じての途切れることのない(宗教的)純潔さ、誓わないこと、嘘をつかないこと、神はあらゆる善の原因であるが、いかなる悪の原因でもないと考えていること、である。愛徳の例は、金銭、名誉、快樂に対する無欲さ、節制、忍耐、さらにつつましさ(ὀλιγόδεια)、単純素朴さ(ἀφέλεια)、満足(εὐκολία)、謙虚さ、律法遵守(τὸ νόμιμον)、落ち着き(τὸ εὐσταθές)、及びこれらと同類のさまざまな性質である。愛人の例は、好意(親切)、平等(分けへだてしないこと)、いかなる言葉を用いても説明し切れないその共同生活、である。この共同生活について短かく言及するのは場違いなことではな

いであろう。

85. まず第一に誰の家もその人個人のものではなく、万人にとって共同のものである。実際それは同じグループ（結社）の共同生活のために解放されているのみでなく、よそからやって来る同信の者たちのためにも開かれている。

86. 次に、彼らは一つの金庫を全員が共有し、共同会計であり、衣類も共有、食事も共同で、一緒に集まって食べるのである。同じ屋根の下で共同の生活をし、食卓も共にしているという生き方をこれほどに徹底して行なっているのは彼ら以外では見出し得ないであろう。それも当然のこと、彼らは一日働いて手に入れる報酬は個人のものとしてしまい込むことなく、すべて（皆の）真中に提出し、共同のものとして、それを利用したいと望む者たちの便宜に供するのである。

87. 病人たちは何のかせぎもないからといってないがしろにされることなく、治療に必要なものは共同会計からまかなわれるので、何の心配もなくあり余る中から消費し得るのである。老人たちに対しては敬意と配慮が払われるが、それは両親が本当の子供たちによって手（行ない）と豊かな気配りをもって何不足なく老後の世話をされるのに似ている。

88. このような徳の競技者たちをこの哲学は生み出すのである。この哲学はギリシアの（哲学）用語に凝ることなく、称賛さるべき実践という訓練を課する。この実践によって何ものにも隷従しない自由が確立するのである。

89. その証拠は以下のごとくである。各時代ごとに性格も傾向も互いに異なる数多くの支配者たち（*δυνάσται*）がその地方を次々と支配したのだが、その中のある者たちはその野蛮さの追求において野獣の残忍さをもしのぐほどであり、残酷非道の限りをつくし、従属民たちをまとめて虐殺し、あるいは屠殺人のように生きながら彼らの肢体各部をばらばらに切り刻み、人間界のできごとを見そなわし給う正義（の女神）によって（彼らが苦しめた人々と）同じ苦しみ<sup>(7)</sup>にあわせられることになるまでは、（その悪行を）やめようとしなかったのである。

90. また（支配者たちの中のある者たちは狂暴さと激しい怒りとを他の形の悪にすりかえて、言葉で言い表わすことのできないような非道な行ないを重ね、口では穏やかなことばを語りながら、猫なで声の陰に深い憎悪の念をちらつかせ、毒をまきちらす犬（狂犬？）のような仕方じゃれつき、いやし難い災いの原因となり、各町ごとに自分たち自身の不敬虔と残酷さとの記念碑として、苦しめられた人々の忘れることのできない不幸の数々を残したのである。

91. （このような支配者たちの中でも）とりわけ残忍な人々や極めて欺瞞的で不誠実な人々ですらも、エッセネ人——あるいは敬虔な人々——の上述の集団になんくせをつけることはできず、全員がこれらの人々（エッセネ人）の善美（徳）に圧倒され、彼らをその本性上自主独立の自由人たちのごとくに取り扱い、彼らの共同の食事や、いかなる言葉を用いても説明し切れないその共同生活（交わり）を賞賛した。この共同生活は完全にして極めて幸福なる生活の最も明瞭な証拠である。

## ピロン『仮設』11.1-18

1. われらが立法家（モーセ）は無数の弟子たちを促して共同生活（交わり）へと向かわせたが、この者たちはエッセネ人（*Ἐσσηῖται*）と呼ばれている。彼らはその聖潔の故をもってこの呼称にふさわしい者とみなされたものと私には思われる。彼らはユダヤの多くの町々に住んでいるが、多くの村々にも住んでおり、<sup>(9)</sup> 多人数の大集落を形作っている。<sup>(10)</sup>

2. 彼らがこの生活を選んだのは民族的な動機によるものではなく——自発的に何かを行なおうとする人々には民族などというものは関係ないものである——<sup>(11)</sup> 徳に対する熱意と人間に対する激しい愛情の故である。

3. エッセネ人の中には幼児は一人も居ないし、ひげの生えはじめた者や青年（若者）も居ない。このような（若い）者たちはまだ年齢的に成熟していないためにその性格が定まらず、新しいものにとびつきやすいからである。（エッセネ人たちは）成熟した（*τέλειοι*）<sup>(12)</sup> 男たちで、既に老年に近づいており、肉体の（欲望の）流れにおぼれることも情念に導かれることもなく、類まれなる真実の自由を心から楽しんでいるのである。

4. 彼らの自由を証明するのはその生活である。誰一人私有財産を持つとしようとする者はなく、家、奴隷、土地、家畜、その他何であれ富をもたらすようなものは一切私有しない。すべての物を（皆の）真中に出してひとまとめにし、それらすべてから生ずる利益を共同で享受する。

5. 彼らは友好的な結社を作り、同じ場所に住んで共同の食事をし、すべてを共同の利益のためになしつつ時を過ごしている。

6. 彼らはそれぞれ異なった仕事に従事し、しかもその仕事にうむことなく猛烈ないきおいで取り組み、寒さも暑さもその他いかなる大気の変化をも口実に（して休憩）することはない。陽が昇る前にいつもの仕事に向かい、陽が沈むとようやく帰宅する。体操競技に出場するために整列している者たちに劣らず（勤労を）喜んでいるからである。

7. 彼らは自分たち自らに課している訓練の方が、肉体の盛時と共にその活力を失うことがない故に、体操競技の訓練よりも人生にとって益が多く、<sup>(13)</sup> 霊魂にとっても肉体にとっても、より快くかつより永続的であると考えている。

8. 具体的に言えば、彼らの中のある者たちは、播種や耕作にたけた農夫であり、ある者たちは牧夫であってあらゆる種類の家畜を管理し、またある者たちは蜜蜂の群を飼っている。

9. 他の者たちはさまざまな技術に通じた職人たちである。そのため彼らは生活必需品に事欠くようなことはない。彼らはとがめられるところのない収入を得るために役立つことは決して後へ遅らせない。

10. 各人はこのようにさまざまな仕事によって報酬を手に入れると、選ばれ（て任命され）た一人の会計係に与え、彼はこれを受け取ると直ちに必要な品々を購入し、豊かな食料やその他人間が生きていくために必要とする一切のものを提供する。

11. 彼らは毎日毎日生活を共にし、食卓を共にし、同じもので満足し、つつましい生活（*ὀλιγότης*）を愛し、ぜいたくを霊魂と肉体の病として避ける。

12. 彼らは食卓を共にするのみでなく衣類をも共有し、冬には厚い外套が、夏には簡素なシ

ャツが出されており、誰でも容易に自分の望む衣類を取ることができるし、そうすることが許されている。個人の物は全員ののものであり、逆に全員のものは個人のものであるとみなされているからである。

13. さらに、彼らの中の誰かが病気になった場合には、共同会計によって病気の面倒を見てもらうことができ、全員の世話と配慮とによって看病される。老人たちはたとえまたまた子供がなくても、ただ子供が多だけでなくよい子供に恵まれた親のように、最も幸福なそして豊かな(快適な)老年を過ごしつつ世を去るのを常とする。自然の本能というよりは自発的な意志によって彼らに仕えようとするこれほど多くの者たちから(老人たちは)特権と尊敬を与えられるのである。

14. さらに彼らは、鋭い洞察力をもって、結婚を、共同生活を破壊するおそれのある唯一の、あるいは、最大のものとみなして、ことさらに強い節制力をもって、結婚を避けた。エッセネ人たちの中には結婚している者は一人もいない。女(妻)は自己愛が強く、異常に嫉妬深く、夫をおびきよせてわなにかけ、たえず魔法をかけて夫の性格を自分の支配下におさめてしまうのにたけているからである。

15. おべっかや、舞台上にでもいるようなその他の演技に精を出し、(夫の)目と耳をわなにかけると、だまされた臣下たちとも言うべき者(夫)たちの最も大事な部分である理性(ὁ ἡγεμῶν νοῦς)を欺くのである。

16. その上もしも子供でもできようものなら、次第次第にずうずうしくなり、以前には空とぼけて還まわしになぞめかして言っていたようなことを勇敢(大胆)に明らさまに言うようになり、恥知らずにも共同生活をそこなうようなことをあれこれと(夫に)無理にさせるのである。

17. 妻の魅力のとりこになり、あるいは自然の本能によって子供のことに心を向けるようになると、もはや他の人々に対してそれまでと同じ人物ではなくなり、自分でも気付かぬうちに別人になり、自由人ではなくて奴隷になってしまうのである。

18. まことに彼らの生活はこのようにうらやましいものであり、私人(平民)のみならず大王たちですらこの人々に驚きかつ仰天し、彼らの尊厳あふるる生き方になお一層の賞賛と名譽を与えてこれを称えているのである。

ヨセフス『ユダヤ古代誌』XIII 171-3

171. 当時ユダヤ人の中には三つの学派(αἱρέσεις)があった。それらは人間の情況(πράγματα)に関して異なった立場をとっており、一つはパリサイ派、一つはサドカイ派、第三はエッセネ派(Ἐσσηνοί)と呼ばれていた。

172. パリサイ派の主張によれば、ある事柄——すべての事柄ではない——は運命の仕業であるが、(別の)ある事柄が起こるか否かはわれわれ自身(の自由意志)にかかっている。これに対してエッセネ派(τὸ τῶν Ἐσσηνῶν γένος)は、運命こそが万物の支配者であって、運命の決定なしには何一つ人間の身に起こることはない、と説明する。

173. 一方サドカイ派は、運命を否定してそのようなものの存在を認めず、人間の事柄は運命に従って成就するのではなく、すべてはわれわれ自身（の力）にかかっているのであって、幸福の原因となるのもわれわれ自身であり、またわれわれが不幸な目にあうのもわれわれの無思慮によるのである（と考えている）。

ヨセフス『ユダヤ古代誌』XVIII 18-22

18. エッセネ人（*Ἐσσηνοί*）は万事を神の手に委ねるよう教えている。彼らは靈魂は不滅であると考え、正義に近づくべく激しく努力しなければならないと考えている。<sup>(14)</sup>

19. 彼らは奉納物（*ἀναθήματα*）は（エルサレムの）聖所に送るが、犠牲は（ユダヤ教主流とは）異なった彼ら独特の聖潔概念（*ἀγνείαι*）に従って<sup>(15)</sup> 献げる。この故に、（ユダヤ人なら）誰でも入ることのできる神殿境内に近づくこと<sup>(16)</sup> とせず、自分たちだけで犠牲を献げている。その他の点については、彼らはその生き方において最も優れた人々で、専ら農業に従事している。

20. 自ら有徳の士をもって任じていたあらゆる人々に優って彼らは驚嘆さるべきである。ギリシア人の許にせよ非ギリシア人の許にせよ、これほどの高德はかつて、ほんのわずかにせよ存在したことはないが、彼らは（他人に）妨げられないよう努力しつつ大昔からそれを守っているのである。彼らは財産を共有し、金持ちも何一つ持っていない人以上に自分の財産を享受することはない。このような生活を送っている人々の数は四千人以上である。

21. さらに彼らは（共同生活の中へ）<sup>(17)</sup> 妻を連れ込まず、また奴隷を持つともしない。後者（奴隷所有）は不義につながりやすいと考え、前者は分裂を生みやすいと考えるからである。彼らは自分たちだけで生活し、お互いに奉仕し合うのである。

22. 彼らは会計係として立派な人々を挙手によって選出し、収入や土地からの収穫すべてを委ねる。また同様に食物類をととのえる祭司たちを選出する。彼らはダキア人の中のクティスタイと呼ばれる人々と何ら異なることなくそっくりの生活をしているのである。<sup>(18)</sup>

ブリニウス『自然史』V. xv 73

（死海の）西岸でエッセネ人（Esseni）たちは、常に（彼らに）害を与える海岸を逃れて（住んで）いる。彼らは孤独な種族（gens）で、世界の他の種族以上に驚くべき種族である。女は一人もおらず、あらゆる愛欲（venus）を拒み、金も無く、シュロ（の木）を伴侶とする。日毎に多くの人々が押し寄せてくるので、逃亡した人々と同数だけの群が再生する。人生に疲れた人々を、運命が（その）転変によって彼ら（エッセネ人）の生き方へと引き寄せするのである。そのため——言っても信じてもらえないだろうが——誰も生まれられないにも拘らず、何千世代にもわたって、この永遠の種族は続いている。他の人々が（自分の）人生について悔恨の念を抱くことが彼らにとってはこのように豊かな結果をもたらすのである！

彼らの下方（南方？）にエンガダ（エンゲディ？）の町があった。これは、（その土地の）豊穡さとシュロの林（の広さ）においてエルサレム（エリコの誤り？）に次ぐものであったが、

今では（エルサレムと並んで）今一つの廃墟と化している。その次に岩山の上の要塞であるマサダがあるが、これもアスパルトの海（死海）からそんなに離れていない。ここまでがユダヤである。

付記：ヨセフスの『ユダヤ古代誌』XV 371-9 はエッセネ人の予言（予知）能力について言及したもので、われわれの主題に直接関係しない。また『ユダヤ戦記』II 119-161 は全体を引用紹介するには余りにも長すぎる。さらにこれらは1981年夏より刊行開始予定の拙訳『ヨセフス全集』に収録されることになっており、特に後者は1982年前半に刊行を予定している『全集』第一巻第二分冊に収録されるので、そちらを参照されたい。

### 資料注

1. エッセネ派という名称は、勿論ピロンの言うようにギリシア語に基づくはずはない。むしろ彼の時代に既にその意味や語源が不明になっていたということがここからうかがわれる。これを東方アラム語で「敬虔な」を意味する *hasên* あるいは *hasayyâ* に結びつける説もある。この点については他の機会にふれることにしたい。
2. *μετεωρολέσχης* についてはプラトン『国家』489 C 参照。
3. このような哲学の三区分（『農業について』14 以下にさらに詳しい叙述がある）はピロンに固有なものでなく、ストア派に一般的なものである。
4. これはかなりピロン自身の立場に引きつけた説明である。
5. *ἀδιάφορον* (pl. *ἀδιάφορα*) はキティオンのゼノンに由来することばで、ストア派の用語である。
6. エッセネ派が誓いをしないことについてはヨセフスも『ユダヤ戦記』II 135 でふれている。
7. この文章と『ユダヤ戦記』II 152-3 との類似が注目される。ヨセフスがピロンを読んでいたとすると——その可能性は高いように思われる。さもなければヨセフスとピロンはエッセネ派について共通の資料を用いていたと想定せざるを得ない。この点詳しくは他の機会にふれる予定。——ヨセフスの文章はピロンのこの文章に触発されたものかもしれない。
8. このことばには「著名な人たち」の意もある。
9. この記述は『すべての善人は自由である』76 の記述とは矛盾するが、『ユダヤ戦記』II 124 の記述（「彼らは一つの町に住んでいるわけではなく、多くの者たちが各町ごとに定住している」）に一致する。
10. この文の直訳は「……村々や多人数の大集落に住んでいる」であるが、おそらく訳文のように解すべきであろう。
11. この文の訳に訳者は自信がない。原文は *γένος γὰρ ἐφ' ἐκουσίοις οὐ γράφεται* であるが、*γράφεται* の意味がよく分らない。
12. 原語の *μειράκιον* はブルタルコス、ルキアノスらによれば大体二十歳前後の若者を指す。
13. マタイ福音書 5: 48, 19: 21, 第二コリント書 2: 6, 14: 20, エペソ書 4: 13, ビリビ書

- 3: 15, コロサイ書 1: 28, 4: 12, ヘブル書 5: 14 に同じことばが用いられていることが注目される。
14. 問題の多いこの箇所解釈について、ここでは L. H. Feldman (Loeb 版) に従った。伝統的には「正義の報いを熱心に追い求めねばならないと考えている」という意味に解されているようである。
15. 少数の本文伝承に従って近代の多くの学者がこの文に否定詞を加える。その場合も、エッセネ派が全く犠牲を献げなかったとすると死海写本の証言と矛盾することになるので、エルサレムの聖所では犠牲を献げなかったという意味に解することになる。
16. あるいは「しめ出され」(εἰργόμενοι)。
17. デュポン-ソメールは「彼らは妻をめとらず」と訳す。確かに『仮設』14にはエッセネ派は「結婚を避けた」とある。しかし同3の記述に基づいて、若い時に結婚していた者が妻を捨ててエッセネ派の共同体に入るという例が多かったと推測することも可能であろう。『ユダヤ戦記』IIには、エッセネ派は「結婚を侮蔑し」(120) ていたが「結婚と結婚から生ずる子孫とを否定しているわけではなく」(121), エッセネ派の中には生命の継承という観点からむしろ結婚を重んずる者もあった(160-1), と記されている。「ダマスコ文書」7: 6 f., 「会衆規定」(1QSa) 1: 4, 10 f. にも結婚が前提されており, 宗団の中に女もいたことは「ダマスコ文書」14: 16, 16: 10にもうかがわれる。
18. 「ダキア人の中のクティスタイと呼ばれる人々」についてはテキストの問題も含めて不明な点が多い。この点は『ヨセフス全集』の注において詳論する予定。